

[成果情報名]イチゴ「こいのか」の高設栽培における基肥窒素施用量

[要約]イチゴ「こいのか」の高設栽培における基肥窒素施用量は、a 当り 2.0kg が適当で、収量が安定して高く、生理障害果の発生も少ない。

[キーワード]イチゴ、「こいのか」、高設栽培、基肥窒素、収量、生理障害果

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先]（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4318

[区分]野菜

[分類]普及

[背景・ねらい]

イチゴ「こいのか」は、2008年に九州沖縄農業研究センターと長崎県、大分県との共同研究で育成し、2011年5月に品種登録された。「こいのか」は、早生性で年内収量を確保できる品種であるが、収量性及び品質の特性を十分に活かす基肥窒素施用量は明らかでない。

そこで、高設栽培において最適な基肥窒素施用量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 頂果房及び第2次腋果房の収穫開始日は、基肥窒素施用量による差は見られない（表1）。第1次腋果房の収穫開始日は1.0kg/a施用が1週間程度早い（表1）が、第1次腋果房頂果の平均収穫開始日は区間で大きな差はない（データ省略）。第2次腋果房までの果房間葉数は、基肥窒素施用量による差は見られない（表1）。
2. 総収量は、基肥窒素施用量が多いほど増加し、2.0kg/a施用が1.5kg/a施用に比べやや多〜同程度であり、安定した収量が確保できる。年内収量は、いずれもほぼ同程度である。商品果率は、いずれも同程度である（表2）。
3. 主な生理障害果のうち先白果は、基肥窒素施用量の違いによらず重量比で1〜2%程度発生するが、先青果及び角果の発生は殆どない。着色不良果の発生は基肥窒素施用量による一定の傾向は見られない（表3）。
4. 基肥窒素施用量 1.0kg/a では、3月以降の草勢低下が顕著となる（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 長崎県型高設栽培システムにおける成績である。
2. 着果負担等生育状況に応じて、液肥等による追肥の施用を考慮する必要がある。

[具体的データ]

表1 基肥窒素施用量と果房間葉数及び各果房収穫開始日(2010年)

	頂果房	頂果房-第1次腋果房		第1次-第2次腋果房	
	頂果房収穫開始日	果房間葉数(葉)	第1次腋果房収穫開始日	果房間葉数(葉)	第2次腋果房収穫開始日
N-1.0	11月26日	5.7	1月31日	3.3	3月14日
N-1.5	11月26日	5.3	2月8日	3.7	3月11日
N-2.0	11月26日	5.6	2月8日	3.3	3月14日

表2 総収量、年内収量及び商品果率

	総収量(kg/a)		年内収量(kg/a)		商品果率(%)	
	2009	2010	2009	2010	2009	2010
N-1.0	426	531	103	115	96.0	94.4
N-1.5	494	538	104	128	96.1	95.2
N-2.0	521	538	101	120	96.0	94.2
N-2.5	522	—	102	—	96.0	—

※商品果: 不受精果、くず果(7g未満)、着色不良果等を除く市場販売可能な果実

表3 生理障害果の発生率(2010年、総重量比%)

	先青果	先白果	角果	着色不良果
N-1.0	0.0	1.2	0.0	2.6
N-1.5	0.0	1.9	0.0	2.0
N-2.0	0.0	1.8	0.0	3.4

耕種概要

栽培様式 高設普通ポット栽培
 栽植株数 700株/a
 培地加温 16℃設定
 収穫終了 5月15日
 12月上旬及び1月上旬にグリーンキーパーを0.1kg/a施用
 2009年 定植 9月15日
 追肥 12月24日以降施用
 1回当たり施用量は0.012~0.016kg/a(チャレンジP; N-4等)、総窒素施用量は0.08kg/a
 2010年 定植 9月17日
 追肥 12月18日以降施用
 1回当たり施用量は0.008~0.01kg/a(OKF1; N-15)、総窒素施用量は0.11kg/a

試験区の構成

基肥窒素施用量 1.0kg/a、1.5kg/a、2.0kg/a、(2009年)2.5kg/a
 定植前にイチゴロングパワー(11-9-8)、
 マルチ前にスーパーエコロング424(14-12-14)を8:2の割合で施用

[その他]

研究課題名: イチゴ新品種「こいのか(高良6号)」の生産安定技術確立
 予算区分: 県単
 研究期間: 2009~2012年度
 研究担当者: 野田和也、前田衡、藤田晃久